



ホールが防災拠点となることで 存在意義を高めるための取り組み

横浜遊技場組合 (神奈川県遊技場協同組合)

「横浜遊技場組合 地域の『災害拠点』」事業



横浜遊技場組合
組合長
飯島隆史さん



ホールの防災グッズコーナーに取り揃えられた非常食

東日本大震災の被災を教訓に ホールに非常用の水を備蓄する

東日本大震災が発生した2011年3月11日、首都圏では鉄道がすべて止まり、幹線道路には重い足取りで帰宅を目指す人々であふれかえっていた。スーパーやコンビニには食料や飲料などを求める人々が殺到し、あつという間に店内の棚が空っぽになるほどであった。あの惨事に遭遇した人にとっては、それは忘れられない体験になったに違いない。横浜市でも多くの帰宅困難者が出たが、そのとき幹線道路沿いにあったホールの社員がトイレの開放や飲料水の配布を行ったところ、多くの方々から感謝の言葉をいただいたという。

この大震災を機に、横浜遊技場組合では傘下の122ホール(2016年2月現在)で、災害に備えた水や非常食の備蓄、景品コーナーでの防災コーナーの設置などに取り組もうという機運が高まった。その多くが駅周辺や国道・県道などの幹線道路沿いに位置していることから、ホールを「防災拠点」として、市民にトイレや休憩所として開放し、水を備えることが一番大事であると考え、まずは非常用飲料水の備蓄をすることにした。

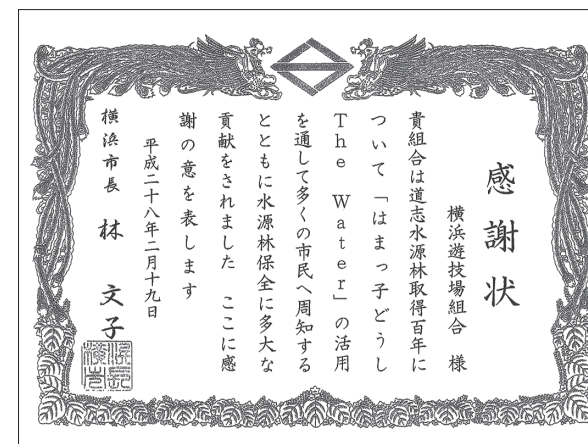
そのため横浜遊技場組合では、傘下の支部組合と協力して、横浜市が販売するミネラルウォーター「はまっ子どうし The Water」を4,000ケース(9万6,000本)購入し、傘下122ホールに配布し、万一災害が起きた場合には、それを命の水として市民に提供することにした。また、ホー



災害に備えた水や非常食の備蓄、景品コーナーでの防災コーナーの設置に取り組む



横浜市が販売するミネラルウォーターを購入し傘下122ホールに配布



活動に対し横浜市長から感謝状を受領

ルにおいては、それを防災グッズコーナーで展示することで、遊技客をはじめとする市民に災害時に向けた備蓄の大切さを啓蒙するとともに、「はまっ子どうし The Water」については、9月1日の防災の日や東日本大震災が発生した3月11日に市民に配布し、防災意識を高めることにつなげることにした。

横浜市の水道事業の広報にも 一役買ったホールによる水の購入

折しも横浜市では2016年が道志水源林取得100年にあたることから、市民に水源林の大切さについての広報に力を入れており、「はまっ子どうし The Water」をホールの防災グッズコーナーに取り揃えたことに対し、広報に多大な貢献をしたということで横浜市長から感謝状を受賞した。「はまっ子どうし The Water」は横浜市の水源のひとつである山梨県道志川の清流水を詰めたもので、横浜の水源や水道事業への関心を高めてもらおうという目的で作られているもので、その収益金の一部は道志水源林環境の保全にも役立てられている。感謝状授賞式においては、「各方面から高い評価を受けており、ぜひ継続してほしい」と、横浜副市長から期待の声が寄せられた。

横浜遊技場組合では、こうした取り組みに関する情報を地域紙の「タウンニュース」に提供し、掲載を依頼したところ、ホールが防災拠点になることを知った市民から問い合わせがあるなど、予想以上の反響があったという。ホールのスタッフもこうした活動を積極的に行うことで、防災意識と災害に対する備えの重要性を再認識し、災害時の地域貢献に対する心構えも高まっているという。また、こうした動きをきっかけに、消防署からはホールや駐車場を災害時の救護活動の拠点として活用したいという申し入れもあり、現在、実現に向けた準備が進められている。

この活動は今後も継続していくことになっており、今年3月には、「はまっ子どうし The Water」1,000ケースをホール配布用として購入した。